

空手道詳説（22）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その5. 薩摩藩の琉球侵略）

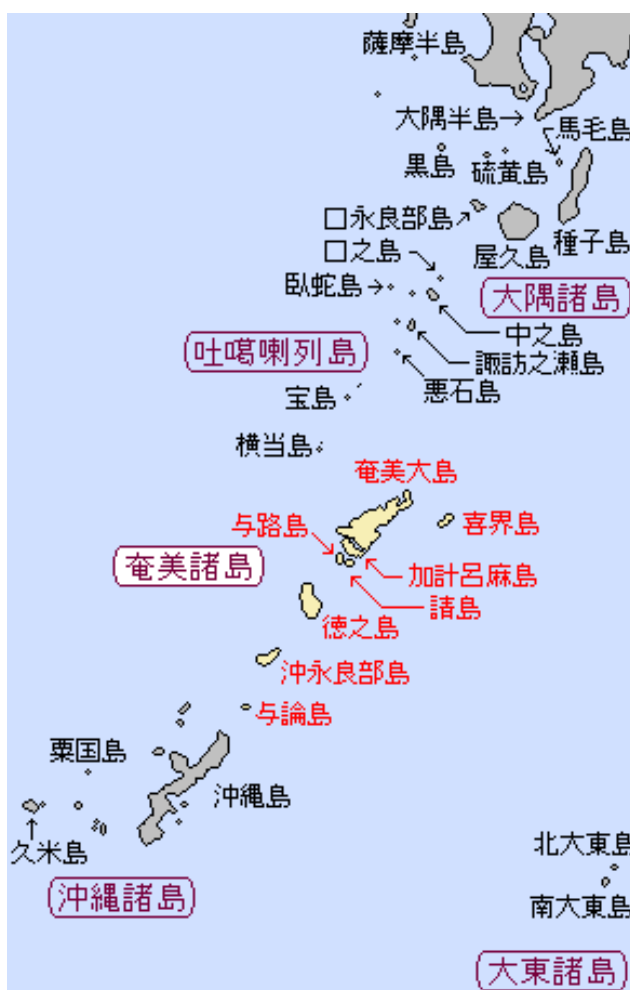
（1）薩摩藩侵略のプロローグ

ア 奄美大島などの琉球国支配

日本本土（前項まで大和と表記してきたが、時代が変わったため、分かり易く日本と記す）や奄美群島（現在は群島の呼び名が定着）、沖縄諸島など各地間の交流は、先史時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代などを経て、活発に行われていたばかりか、九州地方を経て南下する人々の移動も繰り返されてきた。

日本書紀（720年完成）657年（斉明3年）の項に「海見嶋」、682年（天武11年）の項に「阿麻弥人」、続日本紀（797年完成）の699年（文武3年）の項に「奄美」、714年（和銅7年）の項に「奄美」とあるが、これらは全て奄美群島のことと考えられている。

中世になると、奄美大島を含む九州南方の諸島を「貴海国」（きかいこく）と称していたと、臨濟宗の僧・虎関師錬（こかんしれん、1278～1346年）が



著した「元亨釈書」(げんこうしゃくしょ)という我が国最古の仏教通史に記されている。

貴海国の名は、奄美大島のやや北東部に位置する喜界島(きかいじま、又はきかいがしま)の島名となって今に残っている。

古来より、貴海国までは日本の領域内とされ、沖縄本島以南の沖縄諸島、いわゆる「琉球国」は、異域とみなされていた。

それが、1445年に第一尚氏王統第4代王の尚思達(1408~49年、在位:1445~49年)が奄美大島に攻め入り、戦いの末1447年これを従わせた。

その後も、第6代尚泰久王(1415~60年、在位:1454~60年)から、第一尚氏王統最後の王となった第7代尚徳王(1441~69年、在位:1461~69年)まで、大宰府(7世紀後半から九州・福岡県西部に置かれた地方行政機関)とのつながりが強いといわれた喜界島に毎年のように攻撃を仕掛け、1462年遂に制圧するに至った。

これをもって、琉球王国は奄美群島全域を支配下に治めた訳だが、戦費がかさんだ財政の疲弊、膨張政策が招いた内政混乱によって人心の信頼を失い、首里では群臣のクーデターにより尚円王が擁立され、第一尚氏から第二尚氏へと王統が交代した。

第二尚氏の時代になると、第4代王となった尚清は、1537年奄美大島で起こった与湾大親(よわんうふや、生年不詳~1537年)による反乱を鎮圧し、同時に倭寇に対する防備も強化している。これらの琉球国支配の概要は、前にも多少述べておいた。

琉球王国が、このようにして奄美群島を制圧できた理由の一つに、日本国内における室町幕府の全国支配体制弱体化が挙げられる。諸将が入り乱れて争う群雄割拠の時代は、九州から遠く離れた辺境の地、奄美群島への関心は徐々に失いつつあった。琉球王国はその隙に乗じて、勢力拡大に成功したみることできるであろう。

ただ、琉球王国や奄美大島とは隣国的存在にあった薩摩と大隅の守護大名・島津氏だけは、産品の交易を通じて奄美群島への関心を持続していた。島津氏には、交易の利益独占のため、本土から奄美や琉球へ渡る船を統制しようという試みがあった。

イ 文禄慶長の役と日明貿易の破綻

日本の天下統一を果たし天下人となった太閤豊臣秀吉(1537~98年)は、大明帝国の征服という遠大なる計画を目論み、配下の諸大名を糾合して遠征軍を立ち上げた。

まず、秀吉は明の冊封国である李氏朝鮮に服属を強要したが拒まれ、この遠征軍を朝鮮に差し向けたのが1592年(文禄元年)で、翌1593年の休戦までを「文禄の役」という。次いで、1597年(慶長2年)の講和交渉決裂によって戦いが再開し、翌1598年秀吉の死によって日本軍が撤退して終結したのが「慶長の役」である。

これら秀吉の作戦に対する明の取った行動は、戦闘が遼東半島にまで及ばぬよう朝鮮半島に出兵したが、戦線は終始膠着状態であった。

休戦と交渉を挟み、朝鮮半島を舞台に繰り広げられたこれらの抗争は、16世紀における世界最大規模の戦争と言われた。

この戦役により、日本と明との間における日明貿易は破綻し禁止となった。



蔚山(ウルサン)城の戦い図 (想像絵)

文禄の役、交戦の道筋

ウ 文禄慶長役後の日明貿易

薩摩の島津は、徳川家康の命を受け琉球国を通じて明との貿易の再開を計ろうとした。更に直接明船の来航に努めたが、いずれも功を奏しなかった。

これらに伴う利が失せた薩摩藩は、文禄・慶長の役での消費と、関ヶ原の戦い（1600年）の軍費による出費が膨大となったため、藩財政は極めて悪化し、その危機打開のため琉球を領国下に置き、明貿易の仲介者として自由に駆使することを考えた。

また、そうすることが国内他勢力の、琉球に対する野望を封鎖する手段であると確信していた。



徳川家康画像

ウ 琉球船の漂着

1602年に、仙台藩に琉球船が漂着した。翌年、徳川家康は薩摩藩を通じて漂着民を琉球に送還させた。しかし、それに対し琉球からは何の謝意の表明もなかった。

薩摩は再三にわたり謝恩使を派遣するように促すが、琉球は依然としてこれに応じなかったため、一旦は問責の軍を送ろうとするが思い止まり、島津義久藩主の弟義弘名義で無礼を咎める書を尚寧王（第7代）に送るに止めた。

しかし、徳川家康や薩摩藩の琉球に対する不満は一層募り、侵攻の機をうかがう口実は更に増えていくことになる。

日本、特に江戸幕府や島津藩に対する頑なとも言える琉球の対応は、後のオの項に出てくる国政の最高責任者である三司官（選ばれた三人で構成される）の一人、謝名大親（じゃなうえーかた、1549～1611年。謝名利山）の政治姿勢が及ぼすところがおおきかったものと筆者は推測する。

エ 江戸幕府の開府

世は移り、1603年（慶長8年）征夷大將軍に任じられた徳川家康（1543～1616年）は、江戸幕府が開き、武家政権として新時代を迎えた。

幕府は、文禄・慶長の役により途絶えた明との通交を画策していた最中、幕藩体制の中で薩摩藩初代藩主となった島津家久（1576～1638年）から琉球政策の進言を受けたのを機に、これまでの情勢と出来事は、琉球征伐への口実を作るに十分と考えるに至った。

オ 謝名親方の反発

1608年9月、家康が琉球に向けて水軍を起こそうとしていると聞いた島津家久は、琉球国に大慈寺の僧・龍雲を遣わし、尚寧王に対し家康に恭順するように諭すが、三司官の一人である謝名親方は、これを聞いて従わなればか、かえって使者の僧を侮罵して辱めた。

こうして遂に、琉球征伐の御朱印が、薩摩に下ることとなったのである。

謝名親方の言動は、後々まで尾を引くことになるが、後に詳しく触れるが謝名個人の人格的要因もあったのではないかと思われる。

（つづく）

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1986年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造

- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和 47 年 4 月 20 日初版、閣文社発行